

陳希夷瞌睡像一件：鍋島直條没後の盛事

井上, 敏幸
佐賀大学：教授

<https://doi.org/10.15017/4741980>

出版情報：雅俗. 10, pp.16-33, 2002-01-30. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



陳希夷瞌睡像一件

——鍋島直條没後の盛事——

井上敏幸

はじめに

鹿島藩第四代藩主鍋島直條は、宝永二年（一七〇五）四月三十日、江戸の青山の藩邸において、五十一歳で没したが、それから三年目の同五年冬、靈元上皇の勅命により、直條旧蔵の「陳希夷瞌睡像」が、仙洞御所へ献上され、恩賜の歌書三部と香炉を拝領するという、鹿島藩にとって、前代未聞の慶事が出来したのである。「陳希夷瞌睡像」とは、そもそも何だったのか、という穿鑿から始めることにする。「陳希夷瞌睡像」とは、直條の兄格峰実外の自筆の文章「藤直堅上進陳希夷瞌睡像記」（平成十一年、祐徳博物館新蔵）に述べられている通り、

直條が生前、中国の仙人陳希夷の睡像に、京都嵯峨の直指庵主道澄月潭の讃を乞い、一幅の掛物として裝潢を施し、秘かに蔵していたものであった。この画像がなぜ、直條によつて愛蔵されていたのかということ、また、靈元上皇がなぜ一覽を欲して献上させるということになったのかということ明らかにしていきたい。

一

まず、宋代の仙人陳希夷先生が何者であったかを明らかにすることから始める必要がある。

いま、最も簡便に、平凡社の『大百科事典』（昭和六十年三月刊）「ちんたん 陳搏 Chen Tuan」の項に

けば、

五代・宋初の道士。字は図南。亳州（河南）の人。

後唐長興年間（九三〇～九三三）の科擧に落第して仕官をあきらめ、湖南の武当山九室巖に隠棲して道術を学び、のちに華山雲台觀などに住んだ。後周の世宗に召され、また宋の太宗のときには二度上京して寵遇され、希夷先生の号を賜った。《易》を好んで《正易心法》などの著作があり、とくに宋学の根幹をなす《太極図》は彼の作ともいわれる。（竺沙雅章）

のとき人物だったと説明されている。

現代の辞典類、諸橋轍次の『大漢和辞典』^{註2}、近藤春雄の『中国学芸大辞典』^{註3}では、仙術を修めた道士であると同時に、『太極図』を伝え、『易』を学んだ宋学の歴史の中で重要な地位を占める人物であったことが強調されているが、近世の人々が読んだであろう彼の伝記類では、専ら、よく眠る仙人で、人相を見ては予言をよくした道士であることが強調されているといえる。

明の王世貞編の『有象列仙伝』は、慶安三年（一六五

〇）に和刻本が出された後、幕末まで、何度も版を重ねた書物であるが、その巻七「陳搏」の項では、「穀ヲ辟ケルコト凡二十余年」に及び、一度眠るや「月を累ネテ起キザル」仙人であると同時に、「人ヲ鑒、物ヲ察シテ聖凡ヲ辨別」することのできる相人であることが強調され、宋の太祖の登極を予言したこと等が記され、陳搏の没年は、端拱二年（九八九）で、年齢は、百十八歳であったとされている。^{註4}

また、宋学の大成者である朱熹の撰になる『名臣言行録』巻十の「陳搏 希夷先生」の項では、「隱居シテ、門ヲ閉ジテ、独リ臥シ、百余日ニ至ツテ起キ」ず、「黄白ノ術」（錬金術）を会得した人物であり、「神仙ノ術」を学び、「人倫ノ風鑒ヲ善クシ」て、宋の太祖の登極を予言した者として、世間では、専らに評価されているが、「有道」の人であることを忘れてはならないことが、強調されている。この『名臣言行録』は、『宋朱晦庵先生名臣言行録』の書名で、寛文七年（一六六七）に和刻され、これまた幕末明治まで、何度も出版され広く読まれたものである。^{註5} 陳搏と宋学との結びつきが強調されてく

るのも、この朱熹の著述に負うところが大であり、時代の人々の理解も、こうした流れに沿ったものだったと考えられる。しかしながら『列仙全伝』が和刻出版された慶安（一六四八―五一）ごろの陳搏仙の理解は、むしろ有道の仙人であると同時に優れた相人と見られていた傾向が強いことが、慶安四年（一六五二）刊の『神相全編』の存在によって窺える。同書内題下の著者名欄には、『宋 希夷陳搏秘伝』と記されているからである。本書は、文化四年（一八〇七）の改版もあって、幕末迄広く行われていたことが知られる。

また、当時の漢詩文の愛好者達の必備の作法書『円機活法』巻十「人品門」「隱者ノ項」には、「希夷先生 陳搏字図南。嘗乗白驢欲入汴中。途聞太祖登極大笑墜驢曰。天下自此定矣。号希夷先生」と、宋の太祖の時代の到来を予言した故事が掲げられており、『増補国華集』では、卷上の「隱居」と「夢^附睡眠」の二項に、それぞれ、

・華山隱士陳搏、字図南云々。隱武当山、常乗白驢云々。
聞藝祖登極、大笑墜驢曰、天下於是定矣。遂入華山
為道士。（「隱居」ノ項）

・陳搏隱^レ睡^ニ 句 睡 ・有^レ時携^テ枕^ヲ就^ニ陳搏^一 翰
（「夢^附睡眠」ノ項）
のごとくに陳搏が出てきており、漢詩文の世界では隱居の人、はたまた睡眠の人として、広く中国・日本の知識人達に親しまれていた人物であつたことも忘れてはならないであらう。

二

では次に、およそ七百年前の中国の有道の仙人であり、相人であり、隱居・睡眠の人である陳搏仙人の画像を、何故に直條は、家臣を長崎に遣わしてまで描かせ、また、靈元上皇は、何故にそうした直條旧藏の画像を、勅命を下してまでも取り寄せ、一覽したいと思われたのか、ということが問われねばならないが、その前に、直條がその画像を手に入れるに至った経緯を確認しておくことにする。

鹿島市立図書館に写本『存誠長崎筆談』二卷二冊が所藏されているが、本書は、直條の命を受けた、家臣並木昌純、存誠が、貞享三年（一六八六）十月、長崎に来た

中国の人数十名から、直接聞き得た、明・清の政治情況、

著名な文人等の動き、地理・植物・動物・織物及び書物等に関する話を筆録し、直條に提出したものである。その中に、陳搏画像をめぐる次のような記事がある。

一、董元基ハ宿ニ居リ申候ヘハ、方々より書画ヲタノミ申候ニ付、南京寺ニ参リ、又林宗順ト申者ノ所ニカクレ居申候。初日ハ、普敬、碧潭同道仕、参申候而、近付ニ罷成候而、先頃指上申候、芙蓉蘭ノ絵ヲカ、セ申候。且又拙作詩ヲ出申候。批点ヲ求申候。次日晚景、基某宿ニ、右宗順同心仕参、陳図南像額ヲカ、セ候。先、董元書曰、「陳名搏号図南。宋太祖皇帝封道号希夷先生。高臥西岳華山頂上」。如此書申候而、像ヲ写申候。

其序ニ某詩ヲ作り申候而、出シ申候。

且喜猩毛唯能言 丹青入妙又驚魂

遙聽湘水煙景好 写出君山月一痕

和

海外相逢傾蓋言 都君詞藻我驚魂

一窓夜話明黎火 月照前溪水一痕

奉和

菅存誠様原韻斧政 董立山拜草

存誠が、自分の宿に呼んで描かせた「陳図南像額」の画者、董元基は、清国の書画をよくした人物で、「貞享三年秋」に長崎に来ていたことは、長崎の聖福寺所蔵の「聖福八景図」の署名に、「丙寅秋日 董立山写」とあることで、証明されているといつてよいが、文化元・二年に長崎奉行支配勘定役として長崎に来ていた大田南畝は、その随筆『瓊浦雜綴』の中で、

○虎溪三笑の画一幅、立山といへる名あるを得たり。賛あり。〔欄外。立山（胡）（処方）の印あり〕（中略）書画人名録に清人來舶の条下、董元基、字処方、号立山、浙江人、行書とあり。此人にあらずや。

と述べ、「立山」を「董元基」、別号「立山」として述べる。^{註10}「董」と「董」の相違に、若干の問題は残るが、格峰の「瞌睡像記」や月潭の「偈并引」及び『桃蘂編』^{註11}中の文章にある「董元基」と本書の「董元基」を同一人物とみてまず間違いない。では、この來泊中の清国の書画家董元基に依頼すれば、陳搏像が描いてもらえるという

情報を、直條等はどのようなルートを通じて入手していたのであろうか。そうした情報を鹿島の地に送っていたのは、『筆談』に登場している、「普敬」「碧潭」の親子ではなかったかと考えられる。董(童)元基が、書画の注文の多さに恐れをなし、隠れていたのを、普敬・碧潭親子が同道してきてくれて、存誠は「近付」きとなり、次の日の夜、存誠の宿(宿舍)へ来て、陳搏像を描いてくれたと述べているわけであるが、この書き方から推測されることは、普敬・碧潭親子は、そもそもより董元基をよく知っており、隠れている彼を連れてくるには、林宗順に頼まなければならぬことを知っており、また、そうした手筈のすべてを整えた上で、存誠の来長崎を待っていたのではないかということである。なぜ、このような推測が可能なのかといえは、それは、普敬・碧潭親子は、ともに長崎の唐寺崇福寺そうふくじと縁の深い黄檗僧の親子だったからである。普敬は、筑後の国の人といわれているが、三十六歳の寛文十年十二月八日、即非の最後を看取るべく長崎の崇福寺にあった桂巖明幢の下で出家し、その後、鹿島の円通山福源寺に二十余年住し、元禄七年(一六九

四)、六十歳で示寂している。そして、その間、息子が出家し、碧潭寂清と号し、崇福寺の唐僧玉岡海崑かいこん(延宝二年(一六七四)渡来)の法嗣となり、崇福寺内に海崑が開いた竹林院の二代目となったことが知られる。そして、この竹林院の創建が、貞享三年であることが注意される。全くの想像ではあるが、この竹林院の開堂式が何かに出席するために、鹿島から父親の普敬が長崎へ出掛けることが分かっている、そのことを知っていた存誠が、普敬の案内で一緒に長崎へ赴いたと考えるのではあるまいか。以上の想像は、あるいは当たっていないのかも知れないが、ともかくも、鹿島藩において、長崎に詳しい黄檗僧達の情報を通じて、董元基なる清国の書画家の来日を知り、直條が、陳搏の画像を入手すべく、家臣の存誠を長崎へ遣わした事実とは、この記事によって、確認できたといえる。存誠の記事「先、童元書曰」に従えば、董元基は、陳搏画像を描く前に陳搏のことを、

陳 名搏。号図南。宋太祖皇帝、封道号希夷先生。
高臥西岳華山頂上。

のごとくに書いて、そして、そのあとで「像ヲ写シ申シ

候」と説明しているが、この陳搏についての董元基による概略だけの簡単な説明は、先に見た、当時の一般的な陳搏像、睡眠を好む仙人であり、予言者であるとする漢詩の世界の隠人のイメージで説明されているといえよう。

三

直條は、こうして入手した陳搏像を、京都は嵯峨の直指庵主、道澄月潭（註5）に送って「讃」を書いてもらっていたわけであるが、その「讃」は、格峰の自筆「藤直堅上進陳希夷瞋睡像記」その他によって確認できる。

擾々塵寰備駐脚

武当華山愛棲遲

丹詔入山微不起

閒心永与白雲期

瞋睡三昧能證明

累月弗醒也太奇

夢裡遨遊三島外

古貌撲真図画妙

僊中傑出一希夷

では、その肝心の画像はどのようなものだったのかというと、残念ながら、現在のところそうした画像を実見する機会をえていないままである。しかし、そのおぼろげな輪郭は、これまた道澄月潭の文章や詩の中に窺うことができる。

道澄月潭の自筆卷子「仙洞恩賜歌書偈并引」（宝永六年三月、格峰を介して、直堅の需めに応じて作った七言律詩）の第一聯に、

長耳美髯睡貌奇

とあるのがそのひとつであり、ほぼ同じ頃に書かれたと思われる『桃葉編』下巻の道澄月潭の「分身入画」の中の別の賛の中でも、

秀眉美髯垂肩

のごとき容貌であつたとされ、その特徴が、肩に垂れ下がる程に長い耳と、美しい頬髭、そして秀れたまなざしを持った人物だとされているが、もう一つ別の道澄月潭の『桃葉編』中巻の「仙貌撲真」では、

蓋其像、広額円軀秀目長髯、手持团扇、睡靠竹椅。

と、その全体像までもが記されている。「秀目長髯」に、

広い額と円いからだという描写が加わり、手には団扇を持ち、竹の椅子に寄りかかって睡っている画像であったことが判明する。直條が所蔵していた董元基画の陳搏像は、道澄のいう通りの椅子に寄りかかって睡っている像であつたと考えられるが、高泉性敦が直接見た陳搏の姿は、

首載荷葉冠、身著紫袍、腰繫胡蘆、足躡草履。童顏鶴髮、鬚長過臍。〔桃葉編〕中卷、高泉性敦「り仙事績」

というものであった。童顔で鬚が長いというのは月潭に近いようであるが、胡蘆（くろ）を腰に下げて、蓮の葉を頭に頂き、草履をはいた姿は、直條の瞋睡像とは異なっている。ちなみに、『列仙全伝』の挿絵では、驢馬にまたがった姿である。陳搏像が様々なスタイルで描かれていたらしいことが推測されてくるのであるが、今見てきたこれら三種の画像は、恐らく中国でもって、流布していたかと思われる陳搏像の反映だったと考えられる。『桃葉編』中巻の「陳仙広伝」の中で、本書の編集を担当した参議藤原韶光は、宋の皇帝真宗が、大中祥符四年（一〇一一）

に、華陰の雲台観において「搏ガ画像ヲ閲シ」たことを歴史的事実として書き記している。陳搏仙人が相人・予言者として降りてくる場所ごとに、そうした画像があつたと考えられるからである。

四

董元基が描いた直條秘蔵の陳搏画像が、道澄月潭のいう、竹の椅子に寄りかかって眠る姿であつたことは、いま見てきた通りであつて、確認できたといつてよいのであるが、道澄は、二度にわたつて「賛」を書いていることが『桃葉編』によつて知られる。とすれば、当然のことながら陳搏画像も二幅あつたことになってくる。そうした眼で道澄の文章を見直してみると、その第一は、『桃葉編』中巻「仙貌樸真」に出てくるもので、その「賛」は、今回祐徳稻荷神社の博物館に収蔵された「藤直堅上進陳希夷瞋睡像記」の「賛」「擾々塵寰慵駐脚云々」に同じで、まごうかたなく直條が家臣並木存誠を介して長崎で入手した董元基の画像であつたことがわかる。即ち、この画像についての道澄月潭の記述は、

于時有人、寄画一幀、請澄題贊。展開視之、則明董元基所繪陳希夷睡像也。

のごとくであり、また「賛」を書き終えて「即ち之ヲ還ス」と記されている。この文章における「有人」の「人」が直條であることは疑う余地はない。直條はこれを表装して秘藏していたのである。これに対して、いま一つの画像は、『桃葉編』巻下「分身入画」に出てくるものであるが、その記事と賛とは、

有人、依董元基所繪陳仙睡図、模写一幅、乞拙賛。

茲附桃葉編末奉伸重重視釐之 微忱云爾。

個是華山陳希夷、仙風道骨出塵壚、秀眉美髯耳垂肩云々

のごとくであって、この場合の「有人」の「人」とは、直條の董元基の画像を別人が模写した一幅であって、道澄月潭の賛も、直條秘藏の画像の賛とは違っており、道澄月潭は新たにこの模写の一幅のために賛を書いたことがわかるのである。しかし残念ながら、この人物が誰か、従って「賛」も、誰の需めに応じて書かれたものであったのか、また、その時期がいつ頃であったのかも、いま

のところ明確にし得ない。直條秘藏の画像の場合も、同様にその執筆年次は不明であるといわねばならないが、

「仙貌模真」の文章は、時間の経過を追った説明がなされており、また同時に、鍋島直條のもとに明の書画家董元基描くところの陳搏仙人の画像が秘藏されているという情報、道澄月潭から、靈元上皇へと伝わっていく経路もたどることができる叙述となっていることが注目されるのである。「仙貌模真」の文章は、いま引用した文章に続いて、先に引用した陳搏仙の画像の図柄が、「蓋其像広額円軀、秀目長髯云々」と綴られているが、その後、道澄月潭は、この画像との出会いに対する驚きを、
吁、此時而此像至。豈不奇哉。

と記した上で「擾々塵寰慵駐脚云々」の「賛」を書き付け、続けて、

題畢即還之。數日後、謁一乘法親王、語其事。親王伝達太上皇之敕聴。後又、獲使其像備于御覽。聖情、大憚、遂留在宮中焉。吁仙、今顯形於縑素之上、現端於芝闕之間、擁護皇基、助宣弘化、十洲三島自在逍遙、洞天福地寿量無極。豈非与彼三千桃葉初生日

以待真人共対渌之句相為始終如合符節者歟。

という文章を書きつけている。

道澄月潭は、直條の画像に「賛」を書き、送り返したのであるが、その年次は確定できない。ただし、『桃葉編』上巻桃源大中道圭の「陳搏名弁」によれば、

茲丁丑冬、命千杲、鐵牛、月潭諸和尚、令各書其事跡。

とあって、靈元上皇が、正覺法親王を介して、道澄月潭らに「陳搏の事績」についての文章を求められたのが、元禄十年（一六九七）の冬であることは、明らかである。とすれば、先に引用した道澄月潭の「仙貌樸真」中の文章「吁、此時而此像至。豈不奇哉」でいっている「此時」とは、元禄十年冬に勅命を受け、陳搏の事跡を書いたその後のことであつたと考えられる。いまかりに元禄十年冬から、翌十一年の春にかけてであつたかと思われる。そして、道澄月潭は、その「数日後」「謁一乘法親王、語其事」つていたのであるから、これもおよそ元禄十一年の春頃のことであつたと考えられる。そして、文章は、親王が、「太上皇之叡聴伝達」したと続けられているが、

これまた、その間にどのくらいの時間がたっていたのかは記されていない。しかし、一年以上の時間を考える必要はあるまい。元禄十一年中、あるいは十二年春迄には靈元上皇の耳に、直條のもとに、明の書画家董元基描くところの陳搏画像が蔵されているとの情報が達していたと考えて大きな間違いはないであろう。大中道圭の文章は、そのまま続けて、「後又獲使其像備于御覽」と記されているが、この場合の「後」は、元禄十一年からは、十年を経た宝永五年（一七〇八）であることは、冒頭で紹介した新出の巻物「藤直堅上進陳希夷臨睡像記」の記事に照らして明らかであり問題はないということになる。

直條秘蔵の画像の噂が、元禄十一年頃、道澄月潭から一乘法親王を介して靈元上皇に伝わり、宝永五年の上進となつたという経路が確かであるとすれば、『桃葉編』上巻中の一乗真敬法親王の文章「夢陳仙記」が少しく気にかかる。親王は、陳搏を夢に見たのは、元禄十二年の「小春初五夜五更」だったと自ら記され、自分の夢に陳搏が現れた理由を、自分がかつて、高泉和尚から何度も何度も陳仙の事を聞いていたこと、さらに「旧歳」（去

年元禄十一年)、靈元上皇が勅命によつて、諸方の老宿達にその事実を書かせられた、そのことに、自分は「旧因」有ることを感じて、夢に見たに違いないと述べられている。画像のことに触れられていないが、画像の話を聞かれたことが影響していたと考えても不都合はあるまい。親王は、夢の様子を、

時有一真人。以白紙一帖、授予曰、三千界氣、七百歳身。(中略)蓋是仙人陳搏乎。雖然如是、不彰形容、不發音声、只恍乎而似在耳目之間者。

のごとくに記されている。「夢」に見るまで陳搏仙人のことを思われていた親王は、いま見たごとく、元禄十一年の段階で、直條の手に陳搏仙の画像があることを知っておられたことは確かであるが、直條の画像を親王が、一見された可能性は、少なくともこの記述を見る限りないといわざるを得ない。当然のことながら、この段階で模写の一幅ができている筈はなく、十一年後にその画像が、靈元上皇のもとに上進されることを知るや否や、その画像の模写の一幅を作らせ、この話の張本人である道澄月潭に、改めて「賛」をお書かせになったと考えてよ

いように思う。あくまで推測にすぎないけれども、以上のように考えてみれば、第二の陳搏仙人画像は、あるいは宝永五年中に、一乗院真敬法親王によつて作られたのではあるまいかと、いうことができるようである。

五

続いて、直條が、陳搏仙人画像を秘蔵していることをお知りになられた靈元上皇は、勝仙院に勅命を下し、翌宝永五年閏正月、直條のあとを継いだ第五代直堅に、その画像を上進させ、大変喜ばれ、その夏の五月に、恩賜の歌書と香炉を下賜されたのであるが、以下、その経緯を、できるだけ具体的にたどつてみることにする。

先にも述べた通り、上皇は、一乗院法親王より、直條が陳搏仙人画像を秘蔵していることをお聞きになられたのであるが、それを上進させようとして、なぜ、勝仙院に勅命を下されたかが、まず問われねばならないであろう。

すでに見たように、直條のことは、一乗院真敬法親王の直談で、靈元上皇に伝わっていたのであるが、もう一

方では、道澄月潭の文章、「有人」の「人」でもって、

上皇の眼にとまっていたことが考えられる。しかしながら、勝仙院についての記事は、『桃葉編』では全く見受けられない。勝仙院についての記事は、結局、格峰の「藤直堅上進陳希夷睡像記」と道澄月潭の「仙洞恩賜歌書偈并引」、および、道澄月潭が、「仙洞恩賜歌書偈并引」を、格峰送るに際して添えた書簡「潭和尚復断橋書」（鹿島市立図書館蔵『上進陳仙睡像因由考』所収）の三つに見出せるだけである。これら三者の記述の中で、靈元上皇から、勝仙院へ、どのように勅命が下り、また、その勅旨が、勝仙院よりどのような経緯を経て、直堅に達し、靈元上皇に陳搏仙人画像が上進されたのか、そしてまた、靈元上皇よりの恩賜の歌書と香炉とは、どのような経路を経て直堅に下されたのかを、具体的にたどってみることにする。

道澄月潭の「仙洞恩賜歌書偈并引」における記述は、次のごとくである。

居士謝世之後、令嗣直堅公、以先人之所愛故、珍藏龍藏。仙洞太上皇、聞有其像、於去歲戊子春閏正月

間、特諭勝仙院大僧正、伝旨於直堅、而令献上之。

直堅不勝恭賀喜、即馳使士而進上之。既入觀覽。龍

顔大懼。繼命勝仙院、転賜以歌書三卷与陶鶏香炉乙

隻。其歌書乃日野・飛鳥井・冷泉、三名卿所写之古

歌也。直堅辱承御賜、頂戴拝受、用為鎮家之宝矣。

格峰への返書「潭和尚復断橋書」の中では、やや省略した形で、次のごとくに綴られている。

令弟泰窩居士所藏陳希夷睡図、達于太上皇叡聴、於

去春閏正月間、特命勝仙院大僧正、伝旨於令嗣直堅

公、令献上之。叡情大悦、賜以御炉歌書二品。貴家

鎮宝、何物加之。

「仙洞恩賜歌書并引」が、格峰への返書よりも詳しいことは一目瞭然といつてよいが、靈元上皇が「特諭勝仙院大僧正」とある部分は、返書では「特命勝仙院大僧正」となっており、上皇が、直接勝仙院に命じられたように読みとれる。また、恩賜の二品が下されるくだりについては、「仙洞恩賜歌書并引」では、「繼命勝仙院、転賜」となっており、やはり直接勝仙院に上皇の意志が伝えられたかと思われる。両者ともにいま一つ具体的な記述で

はないが、勝仙院へは、上皇の意志が、直接伝えられた
ということ、考えていくことにする。

これに対して、格峰の叙述は、やや具体的なものとなっ
ている。

今茲宝永戊子春閏正月某日、仙洞太上皇、^A勅諭勝仙
院大僧正曰、「朕聞、鍋島故備前守家、藏僧月潭之
所賛希夷先生図像。朕樂覽之想。令嗣藏之。卿^B於彼
為通家。早差使取以獻之。大僧正奉勅馳使士小島大
進於江府、伝叡意於直堅。直堅喜此像達天聰、即送
勝仙院。龍顔大悦。^D越五月十九日、勝仙再差前使、
賁来近世名卿、日野黃門、飛鳥井黃門、冷泉平章事、
所写詠歌大概、百人一首等歌書二部、^A籤題九條右府

染翰。并越前伊部陶鶏香爐一隻。寄直堅曰、春間上
進希夷先生図像。上皇叡納受翫不已。由茲今將御炉
歌書二品、^E宣下勝仙、転賜卿者也。此等錫賚、世所
未有。若他人知則必有越例之儀。慎勿外泄云々。直
堅極淋拝受、為鎮家至宝焉。

傍線部に付した記号に従って見ていくと、上皇と勝仙
院との関係に、A「勅諭勝仙大僧正」E「宣下勝仙」と

なっており、やはり、上皇より直接勝仙院に勅意が伝え
られたようである。B「卿於彼為通家」の一文によって、
上皇が、直條を嗣いだ第五代鍋島直堅と、勝仙院とが姻
戚関係にあることを知っておられたことが知られる。

次のCの文章でもって、勝仙院が江戸へ使いに遣わし
た人物が、「小島大進」であったことが知られる。また、
Dによって、恩賜の二品が、五月十九日に、同じ人物小
島大進によって齎らされたことも確認できる。

A・EおよびBによって、上皇が日頃からよく勝仙院
の人為を知っておられ、亡くなった直條及び後嗣直堅が、
勝仙院の親戚筋に当たること迄も知っておられたと推測
されるのである。

そこで、まずは、勝仙院とは、誰のことであつたかを
検討する必要がある。

勝仙院（住心院とも呼ばれた）とは、熊野三山検校で
あつた聖護院門跡の統制のもとにあつた修驗道教団、本
山派の中核をなす院家の一つであり、住持は、補任を受
けていた。いま、貞享二年（一六八五）刊の『京羽二重』
卷四「聖護院」の「院家」の項を見てみると、
^{註16}

院家 勝仙院 洛陽六角堂内 住心院僧正晃玄

の記事があり、その次には、

からす丸 小島大式

という名前が見出せる。勝仙院が、この京都は六角堂内の、住心院僧正であることは間違いない。またその院家に属する先達の一人小島大式が、勝仙院の使士小島大進の先代、あるいはその縁辺の人物であることは間違いないであろう。

では、勝仙院とは、鍋島家の中の如何なる人物であったかを探ってみると、小城鍋島家の系譜に繋がる人物であったことが知られる。佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫の『鍋島加賀守系譜』に小城第二代藩主鍋島直能の四男「僧、晃淳」、また同じく小城鍋島文庫中の『鍋島麟太郎系譜』に「僧 晃淳 妾腹（麟太郎家来西川文右衛門娘）」とある人物に相当することが、やはり同文庫の『御系譜』（寛政二年写）によって確認できる。その記事は、

晃淳^{アツマ}大僧正 童名高磨 妾腹玉松尼

小川坊城藤並相俊広卿、為養子、接京都住心院晃

玄大僧正法跡。十一歳而薙染、先号円了院、名晃存、後改名晃淳。二十許而入院。院号初有二、住心院・勝仙院。晃淳之時、達于朝廷、定一号住心院。未滿六十歳、昇大僧正之官。蓋中其器也。屢出入禁廷加持□□（天子）。又能書大字。凡其所業之徳業、当時不称者鮮矣。寛文七年丁未、生于佐嘉。享保十三年戊申九月卅日、於京都遷化、行年六十二才。法名、退蜜院前大僧正晃淳大阿闍梨和尚。三井寺北院、実祥院、住心院宿坊、位牌或在他院。

のごとくである。つまり、勝仙院とは、小城第二代藩主鍋島直能の四男として、寛文七年（一六七七）に生まれた童名高磨のことで、十一歳で、小川坊城俊広の養子となり、即出家して、住心院晃玄大僧正の法跡を継ぎ、初名、晃存、後に晃淳と改め、大僧正位まで進み、広くその「徳業」が称賛され、天皇の加持祈祷を行い、書家としても著名な僧侶だったのである。なお、小城鍋島文庫の『^{元茂公}直能公 御年譜』にも、「毎度、禁中に被召、玉体を御加持被成候」と、靈元上皇の祈祷僧となっていたこと

が確認される。

以上のように、勝仙院大僧正のことが明らかになれば、逆に、なぜ、直能の四男が坊城家の養子になりえたかという問題が浮かび上がってくることになる。直能と坊城家との関係、また、坊城家と靈元上皇、さらには直能と天皇家との関係がいかなるものであったかを見ておく必要がある。

六

まず、直能と坊城家の関係から見ると、その関係は、寛文元年、直能四十歳の折に、坊城俊完きたの養女於伊賀姫を、後室に迎えたことに始まる。このことについては、小城鍋島文庫蔵の『直能公御年譜』（十一冊 近世後期写）が最も詳しい。その全文は次のごとくである。

直能公、於江戸中屋敷、小川坊城大納言藤原俊完
卿御息女於伊賀様卜御婚禮 月日不詳。 於伊賀様御年

貳拾五歳。寛永十四年丁丑於京都御誕生也。同母
堂、御出処不詳。於伊賀様、実ハ、人皇百八代後
陽成院第八皇子良純親王知恩院宮之姫宮也。表向

ハ俊完卿御実娘之由ニ而御縁組被成候。御伊賀様
御一生之間、親王之姫宮と云事、御沙汰不被成御
隠し被成御座候処、俊完卿之御舍弟松崎主計頭殿
御息女お岩の御方、八重姫君様小上謁ニ而江戸被
相勤居候内、此御方御屋敷ニも御縁統処与マ以、折
節宿下リ之節、御逗留由、委細御咄ニ而相知レ候
也。右お岩上謁も宝永三年三月三日、此御方御屋
敷ニ而病死、高雲院殿是也。

という、於伊賀姫の出生の秘密を記したあとに、その父
良純親王についての記事一条がいま一つ添えられている。
その記事は、

二品良純親王ハ寛永廿年十一月甲斐国へ流罪、万治
二年六月帰洛、捨戒、御還俗有、以心庵と被号。寛
文九年八月朔日ニ薨去、六十六歳。依之於伊賀様、
此已後ハ、元朝ニも先御精進之御膳被召上、其後御
祝之御膳上り候也。

のごとくである。二つの記事を合わせ読めば、御伊賀姫
が、自己の出自を隠し通されようとされた理由が、主に、
父親王が、流罪者として幕府より罰された家柄であるこ

とに起因するものであったであろうことは想像にかたくない。於伊賀姫の心は、親王の姫宮という自負と、現在処罰を受けている親王家の出であるという負い目とに、複雑に揺れ動いていたに違いない。しかして、そうした姫宮の心境が、結果として直能との結婚を決断させたと考えてよいのかもしれない。はたして、二人の仲は睦まじく、結婚翌年の寛文二年（一六六二）四月二十六日には、能直を継いだ小城藩第三代藩主元武が生まれている（『鍋島加賀守系譜』一冊 写本）。ちなみに、御伊賀姫は、正徳四年（一七一四）七月二十六日、小城の西岡において七十八歳で亡くなられ、遺骸は小城の星巖寺に葬られた（『御系譜』）。

次に、直能と天皇家との関係を見てみると、その関係は、専ら、直能の歌道への執心が齎したものだといったてよい。直能は、寛永十六年、十八歳の折に飛鳥井雅章に入門し、以来歌道の修練を積み、四十歳の寛文元年には、北野天満宮の能貨より古今伝授を受けた歴とした大名歌人だったのである。明暦二年、父元茂の事業を継いで、別邸桜岡を築いたのであるが、その桜岡の好景が万

治元年に草された木下順庵の「桜岡記」でもって、評判となり、そのことをお聞きになられた後西天皇が、延宝の初め頃、その桜岡の好景を詠まれた御製の和歌一首を賜られたのが、直能と天皇との最初の出逢いであったようである。直能は、延宝七年にも、靈元上皇に自著『夫木類句』の天覧を賜るという栄に浴しているが、いまここで問題としたいのは、そうした結果なのではなく、実際に、どのような人達が、どのように働いた結果、そうした天皇との関係が出来たかということをも具体的に探ることである。

そこで、延宝三年に、直能自らの編集によって成立した桜岡詩歌の総集『八重一重』に収められている和歌を見てみると、最初に新院御製後西院があり、続いて道寛法親王^{聖護院}・権大納言俊広^{坊城}・正二位雅章^{飛鳥井}の順に配されており、最後の二十首目は直能の歌となっているが、その後に、聖護院宮道寛法親王が、法皇後水尾院のもとにおもむかれ、桜岡のことを申し上げられ、お詠み頂いたという一首が置かれている。そしてさらに、その後、二品道見親王照高院の和文の跋が添えられている。

つまり、この『八重一重』の中の桜岡和歌部には、何と当代の天皇家の四方が登場されていることになる。まさに、目を見張るばかりの豪華さであるが、このメンバーを、どのようにして集めえたのかということを考えてみると、それは恐らく以下のごとくではなかったかと考えられる。

『八重一重』の冒頭に、木下順庵の万治元年の文章「桜岡記」があることはすでに触れたが、直能は、この文章を、和歌の師匠である飛鳥井雅章や義兄の坊城俊広に見せては、天皇始め親王様方の桜の歌を集めたいとの希望を、しきりに説いたのではあるまいか。聖護院宮道寛法親王の次に坊城俊広の歌があることは、恐らく、本気で直能の願いを聞き入れ、積極的に引き受けて、動き回ってくれたのは、やはり義兄の俊広であったことを物語っているようである。修験道本山派を統轄する聖護院門跡を戴いて、実質本山派の実権を持つ院家の住職を出した坊城家の当主にとって、聖護院門跡道寛法親王にお願いすることはたやすかった筈であり、その法親王に、兄である新院後西院に詠作の一件をお願いしてもらい、

また、法皇後水尾院へは、これまた弟であり、前の聖護院門跡であった照高院に、詠作の一件をお願い出してもらったということが想像されてよいように思う。やはり、直能が、後陽成天皇の孫に当たられる於伊賀姫を後室に迎えたことが、決定的に作用していたと見て間違いないのである。いま一つ、坊城家と靈元上皇との関係を見てみると、靈元上皇の後宮に入って、憲子内親王を生み奉ったのが、坊城俊広の娘房子であった。藤大典侍と呼ばれた房子の母は、何と飛鳥井雅章の娘だったのである。ということとは、坊城家の養子となった高麿、こと勝仙院は、房子の義弟であり、靈元上皇との関係は、極めて近い縁戚関係にあったといえるわけで、靈元上皇が、直接勝仙院へ、直條旧蔵の陳搏仙画像の上進を命ぜられたのも、いうなれば、どこかに気心のしれた身内の感覚があつたのことだったかと考えられる。異例の下賜の品が下されるのもそうした意識の反映だったと見做してよいであろう。

最後に、鹿島鍋島家と天皇家との関係を見ておくと、直條の父第三代藩主直朝が後室として迎えた鷹司家の養

女万子姫は、花山院定好公の娘であつたが、その生母は、鷹司信尚の室となられた後陽成天皇の皇女清子内親王の娘であつた。したがつて、万子姫は、後陽成天皇の曾孫にあたられる方だつたということになる。ということとは、直條も、皇孫である継母に育てられたことになり、皇室との縁に繋がつていたということになる。あるいは、直條の文章を支えた思想の背後に、そうした自負の念があつたといつてよいのかも知れない。それはともかくとして、陳希夷瞋睡像一件の背景には、こうした鍋島家と天皇家との関係があつたことを、我々は見逃してはならないのである。

註

1 格峰「藤直堅上進陳希夷瞋睡像記」には、「詠歌大概、百人一首等歌書二部」とあるが、鹿島市立図書館蔵『上進陳希夷睡像来由考』所収「藤直堅上進希夷先生睡像記」、同「潭和尚因藤直堅索題仙洞太上皇所賜歌書偈并引」および、道澄月潭の自筆卷子本「仙洞恩賜歌書偈并引」（平成十一年・祐徳博物館新蔵）には

それぞれ「三部」とある。

2 【陳搏】 宋、真源の人。字は図南。号は扶揺子。賜号は希夷先生。武当山九室岩に隠れ、仙術を修め、華山に移居す。五代、周の世宗に諫議大夫を以て召されたが受けず、太平興國中入朝し、太宗に重んぜられる。宋代濂洛閩の学派に於ては太極図といふものが極めて重視せられ、其の図は周惇頤の自得の妙なりとも言はれているが、清朝の黃宗炎の著図学弁惑などの考証によれば、太極図は漢の魏伯陽の創設によるもので、道士修練の術に用ひたもの、それが鐘離・呂洞賓を経て此の陳搏に伝はり、更に种放・穆修の諸人を経て周惇頤に伝はつたものといふ。何れにせよ、陳搏は宋代哲学に重大な地位を有する人であつた。著に指玄篇八十一章・三峯寓言・高陽集・釣潭集がある。〔宋史、四百五十七〕・〔宋史新編、一百七十七〕・〔東都事略、一百十八〕・〔五朝名臣言行録、十〕・〔宋人軼事彙編、一百六十二〕。〔大漢和辞典〕縮写版巻十一 昭和四十三年十月第二刷 大修館書店刊

3 【陳搏】？——九八九。宋の亳州真源（河南省）の人。

字は図南。号は扶揺子。太宗の端拱二年没。好んで易を読み、著に正易心法があるが、その作った太極図は、

周敦頤の太極図のもとづくところといわれる。(後略)

『中国学芸大事典』 昭和五十二年十月 大修館書店刊。

4 架蔵、慶安三年版の近世後期大坂河内屋喜兵衛版本による。

5 架蔵、寛文七年版の明治十七年大阪吉岡平助他五肆後刷本による。

6 近世を代表する命書・相書としても広く行われた。佐賀大学附属図書館市場直次郎文庫蔵本による。

7 架蔵、寛文七年京都八百甚四郎友春梓行本による。

8 架蔵、無刊記本による。

9 古賀十二郎著『長崎画史彙伝』『童立山』ノ項。昭和五十八年十一月、長崎文献社刊。

10 『瓊浦雜綴』は、『大田南畝全集』第八卷(昭和六十年四月岩波書店刊)による。

11 宝永二年十月太上皇御製桃葉編序、参議藤原韶光勅撰、直指道澄、仏国道申校訂、『桃葉編』(大本三卷三

冊刊本)からの引用は、以後すべて国立国会図書館蔵本による。

12 普敬・碧潭については、『黄檗文化人名辞典』(昭和六十三年十二月 思文閣出版刊)「普敬」の項参照。

13 『黄檗文化人名辞典』『玉岡海崑』の項参照。

14 「道澄月潭」については、『黄檗文化人名辞典』「月潭道澄」の項参照。

15 畏友、北九洲大学の錦織亮介氏より『國華』第千二百八十八號(平成十五年二月発行)に、海老根聰郎氏の「長谷川信春筆陳希夷睡圖」の紹介があること、また万福寺獅子林院に「陳仙翁図」一幅が蔵されていることを御教示頂いた。心より御礼申しあげる。ただし、この二図に共通するものは何もないといってよく、また後述することく、直條の像と共通するところもないようである。今後の研究に期待したい。

16 『新修京都叢書』卷第二(昭和四十四年四月 臨川書店刊)所収。